# 研究のススメ
## －自分は研究に向いていない？－

熊本産科婦人科学会
会長　近藤　英治

多忙な日々にもかかわらず、熊本産科婦人科学会雑誌に論文を投稿くださり、著者、査読者をはじめ、会員の皆様に感謝申し上げます。

本号にも示唆に富む症例報告を掲載することができ嬉しく思います。近年、医学雑誌では症例報告は軽視される傾向にありますが、ノイエスを深く掘り下げることで、疾患の本質・病態が１症例から解明されることもあります。また症例報告を契機として臨床や基礎研究に発展していくことも稀ではありません。

研究と聞くと堅苦しいイメージから敬遠してしまう人も多いかもしれません。また、自分は勉強が得意でないから研究は向いていないと思い込んでいる人もいるのではないでしょうか。確かに、研究には自分以外の人でも理解できるように論理的・客観的思考が不可欠です。一方で、研究は勉強とは異なります。ガイドラインや教科書を読み疑問を抱かず鵜呑みにすることは研究の対極にあります。正解が存在するのかさえも分からない問題に挑戦するのが研究であり、勉強は得意でも言われたことしかできない人、手取り足取り指導してもらいたい人は研究には不向きと思われます。他人の言うことを全面的には信用せず、自分でまずはやってみようと思う人、好奇心と忍耐力がある人、素直で謙虚な人、楽天的な人、これらのうち複数が当てはまる先生には、長い人生のうちわずか数年でも研究に没頭いただければと思います。自身の研究を世界に発信し、ガイドラインや教科書を書き換えてみませんか!? 仮に自分の納得のいく研究成果が得られない場合でも、研究の経験は臨床力を格段に高め、人としても成長させてくれます。

第五高等学校（熊本）で学び、物理学者や随筆家として高名な寺田寅彦は、「科学者とあたま」（昭和８年出版）の中で、科学者はあたまはよくなくてはならないが、同時に、悪くなくてはいけないと述べています。彼はその理由を様々な例を挙げ説明していますが（下記抜粋）、まさに宜なるかなである。

*いわゆる頭のいい人は、言わば足の早い旅人のようなものである。人より先に人のまだ行かない所へ行き着くこともできる代わりに、途中の道ばたあるいはちょっとしたわき道にある肝心なものを見落とす恐れがある。頭の悪い人足ののろい人がずっとあとからおくれて来てわけもなくそのだいじな宝物を拾って行く場合がある。*

*頭のいい人は、言わば富士のすそ野まで来て、そこから頂上をながめただけで、それで富士の全体をのみ込んで東京へ引き返すという心配がある。富士はやはり登ってみなければわからない。*

*頭のいい人は見通しがきくだけに、あらゆる道筋の前途の難関が見渡される。少なくも自分でそういう気がする。そのためにややもすると前進する勇気を阻喪しやすい。頭の悪い人は前途に霧がかかっているためにかえって楽観的である。そうして難関に出会っても存外どうにかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難関というのはきわめてまれだからである。*

*頭のいい人は批評家に適するが行為の人にはなりにくい。すべての行為には危険が伴なうからである。けがを恐れる人は大工にはなれない。失敗をこわがる人は科学者にはなれない。科学もやはり頭の悪い命知らずの死骸の山の上に築かれた殿堂であり、血の川のほとりに咲いた花園である。一身の利害に対して頭がよい人は戦士にはなりにくい。*

*頭のいい人には他人の仕事のあらが目につきやすい。その結果として自然に他人のする事が愚かに見え従って自分がだれよりも賢いというような錯覚に陥りやすい。そうなると自然の結果として自分の向上心にゆるみが出て、やがてその人の進歩が止まってしまう。頭の悪い人には他人の仕事がたいていみんな立派に見えると同時にまたえらい人の仕事でも自分にもできそうな気がするのでおのずから自分の向上心を刺激されるということもあるのである。*

妄想や未知への挑戦が大いに歓迎されるのが研究であり、そのワクワクが教室を牽引する原動力となります。若手の先生にとって、本誌が研究を始めるきっかけとなることを願っております。